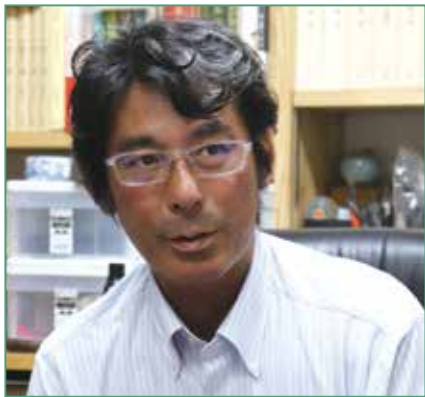


竹内勢雲さん

[書家]



日展をはじめとする展覧会に作品を出展するほか、書塾等で子どもから大人まで幅広い年齢層に書を教えていらっしゃる竹内勢雲先生。高校教諭や小学校での特別講師の経験をおもちということで、小学校の書道指導で心がけたいことについて教えていただきました。

ほめることで、書道が「好きになる」指導を心がけています

小学校1年生の時、母の勧めで書道教室に通い始めました。それから50年にわたって先生の指導を受け、今こうして書の道を歩んでいるのは、先生の「上手にほめる」指導法の賜物だと思っています。

書道教室では、先生はいつも子どもたちに対して「きみは天才だ」「秀才だ」とほめてくださいました。そんな風にほめられて気分の悪い子どもはいません。先生に「自分はうまいんだ」と上手に思い込まされた私は、書道がどんどん楽しく、おもしろくなっていきました。書とは、いくら上達しても、上の立場の人から見れば、「まだまだだな」と思われる所があるものです。

それは子どもたちも同じで、たとえどんなに上手な子どもでも、専門の見地から見れば未熟なところはたくさんあります。それを一つひとつ直していくやり方もあるのですが、私は「基本的にほめ、少ない箇所、できれば一箇所だけ直す」指導を心がけています。もちろん、子どものレベルや食らいつき度に応じて、少し厳しめに指導することもあります。

「好き」という気持ちは、何かをする上でいちばん大事なことです。ほめられることで、「書道が好き」という気持ちが芽生え、おもしろさを感じられれば、自然に努力するようになります。最後は必ずその子なりの上達が見られるようになっていくでしょう。

基本の技法を身につけることとなぜそうするのかを教えることが大事

スポーツなどの習い事では、フォームの大切さについてよく指導されます。正しいフォームが身につけば、最初こそ失敗が続いても、必ずできるようにになります。

これは書道も同じです。小学校の書道では、書道を楽しみと感じさせるとともに、基本の技法をしっかりと身につける指導が大事だと思います。

私は教室のはじめに、毎回、ウォーミングアップとして、半紙に「縦・横・右払い・左払い」を書かせています。初めはうまくいかなくても、くり返して続けていくうちに、これらの基本が必ずできるようになってきます。

また、子どもたちが納得できる指導をすることも大事だと思います。例えば、筆はまっすぐにもつことが基本ですが、「もちなさい」と指示するだけでは、その理由がわかりません。そこで、筆をまっすぐもって半紙にグッと押さえつけ、手を離してみます。すると、筆がピョンと大きく飛び跳ねます。その様子を見せながら、「ほら、筆ってこんなに弾力があるね。字は、この弾力を使って書くだよ」と説明すれば、子どもたちは「そうなんだ!」と納得するでしょう。

ただ「書きなさい」と教えるのではなく、「なぜ、そうするのか」を説明していくと、子どもたちの理解が深まり、書道がより楽しくなると思います。

先生自身が楽しんで教えれば子どもの反応は変わるはず

私は特別講師として10年間、京都の小学校で授業を行ってきました。

授業では文字について、甲骨文字、篆書、隸書、草書と行書、さらに楷書と、美しい姿として完成するまでの歴史を紹介することがありました。小学生には難しい内容だと思われるかもしれませんが、「文字は多くの先人の汗と涙が込められた努力と知恵の結晶なんだ。だから、ぞんざいに書いてはいけないんだよ」と話すと、興味をもって聞いてくれました。様々な字体がまとめられた「書道字典」を見せると、みんな興味津々で、気に入った字体を自分で書いてみようとする子どもがたくさんいました。

小学校の先生は全教科を指導しなければならないので、準備が大変だと思います。時には、先生方がそれぞれ得意にしている分野の内容をからめて教えてみてはどうでしょうか。子どもたちは楽しいことが大好きです。先生が楽しそうに話してくれることなら、内容が少し難しくても、おもしろがって聞いてくれるでしょう。

また、自分一人で全てのことを教えるよう気負わなくてもいいと思います。学習内容によっては、必要に応じてブロの力を借りることも可能です。書道で言えば、地域の書道教室は補完的な役割を担うことができるでしょう。私達もいつでもお手伝いします。

PROFILE

たけうちせいうん ● 1960年京都市出身。杭迫柏樹先生に師事。同志社女子大学・大阪芸術大学非常勤講師、朝日・NHKカルチャーセンター講師。同志社大学卒業後、京都市立堀川高校に勤務(2001年退職)。1987年日展初入選。2014年に2回目の特選受賞。2008年より10年間、京都市立御所南小学校で特別講師として子どもたちに書のすばらしさを伝えた。現在、書塾を通して後進の指導を行うとともに、日展準会員、読売書法会常任理事、日本書芸院常務理事、京都書作家協会事務局局長等を務める。

「上達したい」という純粋な思いを育て「好き」につながれば素晴らしいですね